

- 提言にあたって -

広島県民は、第2次世界大戦の廃墟の中から、半世紀を経て、日本中、世界中の人々と連携しながら、フェニックスのように立ち上がり、経済、産業、科学技術、都市建設等、さまざまな面で、輝かしい復興の歴史を刻んできた。

だが私たちは、戦後になっても、別のかたちの戦争をしてきたのかもしれない。大人たちは企業戦士として経済戦争に明け暮れ、子どもたちは受験戦争に懸命であった。競争社会の中で、ひとは一歩でも前に出て、ひとつでも新しい情報を得ようとし、他者に手を差し伸べる心の余裕を忘れてきた。

それでも1980年代になると、経済大国日本では、メセナ（文化支援）が盛んになった。企業はさまざまな文化活動を支援し、国や自治体も「行政の文化化」を合言葉に、諸種の文化施設を建設し、テーマパークをはじめ多くの事業に取り組むようになった。団地の町内会では法被を着た子どもたちの祭りが行われ、デパートや商店のウィンドウにはニューモードが溢れて、ライトアップされた大通りは美しく飾られていた。空腹を満たす食事、雨露をしのぐ住宅、労働のためのビルから、おしゃれでグルメの街並みが形成されるようになった。だがそこには、いつまでも経済成長が続くという思い込みから、使い捨て、食べ散らしという消費指向を基調にした思い上がりがあったらどうか。企業も行政も、その経済的、財政的余裕から、いわば「旦那衆の甲斐性」で、文化事業への出費に寛大な面があったのではないか。

今、私たちは21世紀のとば口に立つ。バブル経済がはじけ、その後の長い経済不況に喘ぎながら、「先行き不透明」の時代を嘆く声が聞こえる。経済の混迷だけが問題なのだろうか。それならば、耐乏生活をすればすむことである。だがそこに精神の停滞と虚脱が蔓延するとすれば、私たちはそれを憎む。むしろ新しい価値の創出が求められて、なお形にできない苛立ちがあるのでないか。工場生産の現場は大陸諸国に移り、安価で、性能の悪くない製品が日本のマーケットを席卷している。私たちは再度の経済の活性化のためにも、高品質、ハイセンス、ハイデザインの製品の生産に向かわなければならない。しかもポストモダンの風潮の中で、文化に裏打ちされた出所明確な高品質の製品が求められるであろう。「文化立国」ならぬ「文化立県」が望まれている。

人は生垣と言われる。人口の適正な分布があって、そこに文化が育ち、継承される。広島県の人口動態を見ると、一部の都市部を別にすれば、人口減少が恒常化し、特に中国山地と瀬戸内海の島嶼部では過疎化が深刻な問題となっている。広島県には総延長キロ数全国4位を誇るハイウェイなど、各種の道路網が縦横に張り巡らされている。新幹線が走り、国際航路をもつ港湾が整備され、県央地域に位置する空港からは、国内各地はもちろん、海外への航路が開かれている。そのような交通網の発達にもかかわらず、過疎問題は

解決のめどが立たない。経済効率優先の論理を超えなければ、人口の過疎化傾向に歯止めをかけることはできないであろう。だがそのために何が必要なのか、新しい動きがはじまっている。まだ少数であるが、過疎になった地域に、作家や演奏家が、自由な職場を求めて住みはじめている。新しい価値観が人口の逆流をつくりはじめている。

広島県の文化はハイブリッド文化である。日本海に向かう江の川流域の備北地方（出雲文化）、芦田川、沼田川流域から瀬戸内海に広がる備後地方（吉備文化）、太田川流域から瀬戸内海に広がる安芸地方（西瀬戸文化）という、自然地形、産業形態、生活風習を異にする3つの地方からなっていて、それぞれに独自の生活文化、歴史文化を築いてきた。一元的な求心力によってではなく、むしろ三方に広がる遠心的な張力によって、活力ある文化複合体を育成するべきであろう。

21世紀は、群れで生きる世紀ではない。巨大な力の庇護のもとで生き延びる時代ではない。一人ひとりが自分の顔を持ち、自己の尊厳において生存しながら、自然との共生を図り、他の人々との連携を積極的に求め、国際化、情報化の大きな流れにみずからを開いていかなければならないであろう。IT時代においては、相手からアクセスがあってはじめて発信が発信となる。発信機構をいかに整備しても、その情報が没個性的なミニコピーであれば、世界は一地域のホームページにアクセスしてくることなどないであろう。

個性的であることは、文化においてはじめて可能である。自然の気象や地形の違いは、そこに生育し、栽培される果樹や農作物や、耕作に使う農機具や、建築物や、田植えや、収穫期の祭りへと転生してはじめて文化となり、個性を獲得する。海や川の文化においてしかり、都市の生活においてしかり。個性とは、地域やそこに住む人々が、長い歳月を経てつくり上げてきた時間の積分である。

私たちは長く「新しさ」を最高の価値とし、「既にあったもの」を振り捨て、「いまだないもの」を追いかけてきた。だがそれは心の貧しさを呼ばなかったか。むしろ未来は過去に集積されてきた文化の中にしか宿されていないのではないか。文化の中では、物の論理の逆転が起こる。たとえば小の中に大が、過去の中に未来が、老いの中に創造のエネルギーが含まれる。一つの伝統文化の中に、地球大の普遍性が形をなしている。

時間は重層的である。一寸の光陰に喩えられる時間もあれば、「年々歳々花相似たり」という時間もあり、十年一日という時間もある。私たちは、50年前の戦争と瓦礫の街をなお今に記憶していて、「過ちをくりかえさない」と碑に刻み、100年前日本兵を大陸に送り出した宇品港という、共同幻想としての時間をもつ。500年前毛利元就は吉田の城から出て、西国の制覇を目指して戦国絵巻を繰り広げたし、1000年前平清盛は宮島を須弥山に見立てて厳島神社を建立した歴史がある。三次地方に行けば、縄文時代から古墳時代に至るたくさんの古墳の遺跡があり、日本有数の密集度を誇っている。それらを買いて

生きる民衆の生活の時間もある。それらさまざまな歴史が、幾重もの波となって、個人や共同体の記憶あるいは共同幻想として、私たちの生きる今という岸边に押しよせてくる。

文化を形成、継承するのは、人間である。両足で大地に立つという古代ギリシア以来の人間観と、「ジンカン」と読んで人と人之間をさす中国古典以来の人間観がある。その両方の意味の人間が文化を育成してきた。さまざまな年齢、性差、さまざまな職能、さまざまな考え方の人びとが集まって、多様な文化を形成する。すばらしいことではないか。

「眼一代、耳二代、味三代」という世代差を言い当てることばがある。視覚は自分の代で磨くことができるが、音の世界に親しむには親の代からの教育が必要であり、食の味覚は、祖父母の代から伝えられるものだという意味であろう。しかもこの「味」を単に味覚に限定するべきではない。色の世界にも、音の世界にも「味」があり、「趣味」の広がりを持つはずである。このことばを決定論的に受けとめる必要はないが、現代の核家族世代には縁遠いこの価値観は、近代技術による通信機器、A V機器によるコミュニケーションとは別種のコミュニケーションの可能性をものがたっている。

本来、科学も技術も精神の創造的所産であり、これによって私たちは多くの豊かな富の発明や発見や開発を享受してきた。貨幣も、それによって購われる産品もすべて精神の創造物であったはずだ。その初心に私たちは立ち返る必要がある。文化が、新しい価値生産の場であってほしい。

文化は、守旧的であってはならない。「今ここ」という時間と空間の限定を超えて、他の時間と空間へと飛び移り、別の文化の表情を持つことができる。つまり個性的で、「今ここ」をしっかりと生きているものが、情報化、国際化の世界的な潮流の中にあって、みずからを開くことができるのである。

21世紀のひろしま文化は、そのようであってほしい。

このような認識の下に、広島県の文化・芸術振興に関する提言をまとめた。

県におかれては、この提言を踏まえ、県の文化・芸術振興のための新たな指針を早期に策定されることを望む。

また、それに基づく施策の実施に当たっては、文化・芸術振興の専管部局のみならず、県行政組織全体の課題とされることを強く期待する。